賛美

神の大きさ、偉大さは、なかんずく創造者と主という二つの呼称にその表現を見出します。あの方は一切を創造した創造されざる方です。自己自身の中に立っておられ、始まりのない方です。無限で、過ぎ去ることのない永遠なる方です。一切はあの方のものです。それも、事実上の権能によってそうであるのみではなく、本来の権利によってもです。一切を占有でき統御できるというあの方の権利は、あの方が自分ご自身を占有しておられることに由来しています。あの方が一切の事物の主であるのは、あの方が自らの神性の主であられるが故です。あの方の前においては人間は礼拝しつつ身をかがめます。全面的に、留保するところなく、と同時に、自由に、しかも尊厳を保ちつつ。ところで、神のこの同じ偉大さの前では、祈りのもうひとつの動きも迸り出てきます。即ち、偉大さに加えて美しさが輝き出てくるその時には、そうなります。聖書においては神の偉大さは、威厳という刻印のみでなく、栄光、素晴らしさという刻印をも持っています。栄光とは、神の現実が輝きを発していることを意味しています。この栄光、素晴らしさという現実を前にするとき、礼拝の真剣さは賛美の喜びへと変容するのです。

聖書の中でわたしたちは、神の栄光を宣べている言葉、神の栄光を誉め讃えている詩歌や賛歌に繰り返し遭遇します。それらの中では神の崇高な特性がいくつか挙げられています。すなわち、神の聖性、偉大さ、力と知恵、神の永遠性と自由、正義、慈しみ、気の長さなどです。人間はこれらの特性の中へ沈潜するとともに、これらの特性をいわば神の前に並べ、これらの特性の故を

もって神を言祝ぐのです。

ところで、もしかすると、このようにして神の長所を翳して神にお見せすることには多少具合の悪い側面もあると言って、異を挟む人もいるかもしれません。これは、弱者の臣従、対抗手段を持たない者の阿諛を思い起こさせるもので、人間の尊厳とは矛盾するもの、さらにそれ以上に神の尊厳にもそぐわないものと言う人がいるかもしれません。これはそういったものにもなりうるものです――けれども、そういうものにならねばならないわけではありません。名誉を保ちつつ堂々と行なうという仕方で、或る人を賛美するということは不可能でしょうか？　あなたは信頼できる人ですと誰かに言うというような状況になることも、たとえばあるのではないでしょうか。状況によっては、この言葉は、その人をどれほど評価しているか、どれほどの信頼をその人に置いてよいと思っているかを、その人に実感して貰うという本当の友情を意味することもあります。そうです、ひとりの人間から他の人間に移行していくことのできることのなかで最も美しいことに入る褒め方というものは、存在しています。即ち、或る人が別の人に喜びを見出していて、見出しているその美しいもの、幸せにしてくれているものについて当の本人に告げる場合などがそうです。確かに、わたしたちが神に向かって神の崇高な諸特性を確認して差し上げるなどといったことを、神は必要とはしていません。けれども、もし人間が神に喜びを見出していて、神の聖く美しい本質の素晴らしさを言祝ぐとするなら、そうすることは「相応しく、当然でもある」〔ミサ奉献文への「叙唱」より〕ことであり、最も清らかで最も真正なる祈りの形でもある

のです。

ですから、啓示という空間の中でも賛美の祈りはあらゆる所に登場してきます。詩篇の中にも、神の永遠の特性や神の業を次々と誉め讃えていく詩篇などの場合に、神の素晴らしさについての深い体験に発して、聖なる感動を迸らせているかなりの数の詩篇が見出されます。たとえば、三二〔三三〕番、四六〔四七〕番、九五〔九六〕番、九九〔一〇〇〕番などなどです。預言者の場合にも繰り返し神への賛美が炸裂します。たとえば、イザヤの召命の幻視の中でケルプたち(『共同訳』ではセラフィム)が神に献げるあの偉大な賛美に思いを馳せてみましょう(イザ六・三)。福音書の中には、マリアとザカリアの賛美の歌が見出されます(ルカ一・四六―五五、一・六八―七九)。典礼はといえば――壮大な賛美の歌テ・デウムや、繰り返し登場してくる賛歌や続誦を見れば分かるように――あらゆる所に賛美の祈りがちりばめられています。

時としては、神の賛美ということは世界の中にまで広がり浸透しているかのごとき感すらあります。あたかも、創造の事物すべてのところまで出掛けて行って、それらの事物を自分の中に取り込んででもいるかのようです。創造の詩篇(一八〔一九〕、一〇三〔一〇四〕、一四八)や、たとえば〔アッシジの〕聖フランシスコの太陽の歌のような、神に心酔し切っていた人物の心の中にこれら詩篇の詩歌が見出した反響に思いを馳せてみましょう。

そこではあらゆる被造物が神を賛美するようにと勧誘されています。「主を誉めなさい、太陽よ、月よ。あの方を誉めなさい、あなたがた、輝いているなべての星々よ……。あの方を誉めなさい、火よ、雹よ、そして雪よ、氷よ、あの方のお言葉を実行しているつむじ風よ、あなたがた、

すべての山々よ、あなたがた、なべての丘々よ、なかんずく、実の成る木々よ、シーダ杉たちよ、あなたがた、なべての猛獣たちよ、家畜たちよ、這うものよ、翔ぶものよ……」と、詩篇一四八にはあります。これはおとぎ話にあるようなことを意味しているのではありません。神を賛美するための声を、ありもしないのに、詩の形を借りて太陽や海や木々に擬しているのではありません。これらのものはそれぞれその存在において神の素晴らしさの鏡なのです。それは、あの方がこれらのものを創造され、自らの本質の反映をこれらのものをめぐって配されたからです。この反映をこれらのものは反射しているのです。つまり、自分たちの存在を通してあの方を賛美しているのです。これらのもの自身にはこのことは分かってはいません。けれども、人間はこのことを知ることができ、これらのものたちの賛美を自分の賛美とすることもできます。人間はこれらのものたちの賛美を自分の心に受け止め、その賛美を神に向けて口にし、そうすることによって、被造世界の心と口になることができるのです。

礼拝が話題になっていた際に、人間が神の前で身をかがめるのは、神があらゆる程度を超えて権能ある方であるが故ではなく、神が真であるとともに善であり、礼拝に相応しい方であるが故であると言っておきました。神は――かりにこのような言い方が許されるとして――自らの神＝たること をご自身の心情を通して実証しておられるのです。あの方は存在するという意味で存在しておられると同じだけ、〔現に行為している〕現実有という意味でも存在しておられます。あの方はご自身がそのものであるものを現に生きてもいらっしゃいます。あの方が所有しておられ

るものは、あの方ご自身が成し遂げられた業績です。ここにこそ、賛美の最終的根拠も由来しているのです。「主よ、あなたは全能です」という文章は、「あなたは全能でいらっしゃるに相応しいお方です。あなたは全能を生きておられます。あなたはあなたの心情をもって、あなたの力をもって、あなたの行ないをもって全能を実行しておられます。あなたの全能とは正義と真理の純粋なる完遂なのです」と言っている文章でもあります。それ故にこそ、神を賛美することは当然のことなのです。このような方である方が存在されることを霊は喜び、そしてこの喜びが賛美の中で迸り出てくるのです。

神の中には、そのものにどれほどの数の特性があるにしても、そのどれもが同じただひとつの放射しか形成していない或るものがあります。その或るものとは、神の中の最も内奥のもの、神の心の秘密です。すなわち、在るということと正しいということの、現実と意味の、力と功績の、栄光と愛の、権能性と聖性の原＝一致です。この原＝一致が神を神たらしめているのです。この原＝一致に接するとき、喜びに火が着き、賛美へと変わります。この喜びはそのまま感謝となるほどに清らかなものです。すなわち、神が存在しておられることそれ自体を神に感謝するほどにまで、です。それ故に、ミサ聖祭の中の〔栄光の〕賛歌には「おお神よ、わたしたちはあなたの大いなる栄光の故にあなたに感謝いたします」とあるのです。そして、ミサ聖祭の奉献文への序文である叙唱は「聖なる主よ、全能の父よ、永遠なる神よ、わたしたちがあらゆる時に、あるゆる所であなたに感謝を申しあげることは本当に相応しく当然のことであり、正当で救いをもたら

賛美の祈りの根拠となっている神の栄光についての経験が深いものであればあるほど、神の栄光、素晴らしさについての喜びが本物であればあるほど、そこから湧き上がってくる賛美の祈りも清らかなものとなります。そのような祈りにおいては、祈っている人自身も清らかになり、偉大になっていきます。人の偉大さというものは、その人自身の偉大さにあるだけでなく、その人よりも偉大であるものをどこまでその偉大さに相応しく評価できるか、どこまでそのものに栄誉を帰すことができるかということのうちにもあるのです。ですから、偉大なる方そのもの、端的に素晴らしき方そのものでいらっしゃるあの方に帰依し誠を尽くすことは、全くの正義の行為であります。とはいえ、同時にそれは、帰依し誠を尽くしている当の本人にとっても自己実現の行為です。というのは、人間にとって生きるということは、本来は、上方を目指して自分のほうから自力で登っていくことではなく、自分の上方にあるものから降ってくるものなのですから。災いなことよ、もはや自分の上方に何物をも持っていない人は！　神を賛美するとは、本当に本来の意味で人間を生かしているものの存在するところへと昇っていくことなのです。

ですからこそ、わたしたちは神の賛美を実践する筈なのです。神を賛美することは霊を幅のあるものとし、美しくしてくれます。たとえば、朝、十分に休養をとったあとの新鮮な気持ちに発してテ・デウムや詩篇一四八番を口にするなら、その日一日が全く違ったものとなります。こうすること以上に美しい朝の祈りがありうるでしょうか？　もちろん、わたしたちは願いごともし

たらよいですし、わたしたちの追い詰められた現存在の諸案件を神の前に携えていくのもよいでしょう。けれども、もしかすると、わたしたちが自分自身からは眼を逸らして、あの方のほうを見つめるとき、わたしたちはもっと素晴らしい仕方で強められることになるかもしれないのです。そして、わたしたちのことが忘れられている筈はないのです。なぜなら、「天におられる父は、わたしたちが何を必要としているのか、わたしたちがそれをあの方のところへ請いに行く以前から、既にもうご存じなのです」から（マタ六・八）。

神、あの豊かで、贈りつづけ、愛しつづけておられる方

神の本質は汲めども尽きることがありません。黙想する霊、生き生きした宗教経験のためには常に新たな側面がその覆いを外していきます。そして、その新しい側面のそれぞれに対して人間の心は答えることができるのです。ですから、神についての教えが既にそのまま祈りについての教えでもあると言ってよいのです。けれどもここ、この「入学準備学級」ではその教えを全面的に展開することはできませんので、今は最後に、神の特性のうちのもう一つのグループのものを考察するに留めておくのがよいと思います。即ち、神が権能ある豊かな方であり、進んで手を差し伸べる心構えのある方、与えることに喜びを感じている方であるといったこと、そして人間のことを心に掛けておられ、人間に敬意を抱いておられ、人間を愛しておられるといったことについてです。そして、神的本質のこの意味グループにも、祈るということのひとつの原音声が向い

神的なものについてのイメージの中には、願いも感謝も可能ではないようなものも存在しています。たとえば、世界の聖なる秩序としてしか、あるいは善のイデアとしてしか、あるいは現存在の秘密としてしか神を理解しない場合などがそうです。人間の心はこのような神のもとへ自分の苦厄を携えて行くことはできません。このような神の前では願いも感謝も同じように馬鹿げたことでありましょう。唯一可能なことは畏敬とか驚嘆でありましょう。ところが、啓示は、神は強大なる生ける権能であり、欲している力、行動している力であり、耳を傾け、聞き届けることのできるペルソナであると言っているのです。

神は霊です。それも、多くのところでこの言葉が受け取ることになったような単なる裸の論理とか、秩序を与えている力とかいった冷い意味においてのみでなく、聖書が「生ける神」という言い方をする際に言わんとしている意味においてであります。この神は創造しつづけておられる無尽蔵な方であり、すぐ近くにおられる慈しみ深い方であります。霊の巨匠たちの言い方を用いるなら、この神は豊かな神です。しかも、ご自分が自らの豊かさを楽しんでおられるのみでなく、その豊かさを分け与える心構えをもお持ちの方です。どんなプレゼントもあの方の豊かさを減らすことはない故に、決して貧しくなられることのない、限りなくプレゼントしてくださる方です。そして、プレゼントする相手からの応答には一切依存せず、創造しつつプレゼントしておられる故に、プレゼントをすることに嫌気を覚えることも、落胆させられることも決してない方です。

このような神になら、人間の心は向くことができます。

神は、自己自身の中で至福に浸りきり、人間の現存在の窮状に対しては一切無関心なまま、オリュンポスの高みに悠然と生きておられるのではありません。神がこのような生き方をしておられるのなら、本当の意味での願いなど全く可能ではないでありましょう。願いなどは最初から望みのないもの、尊厳にそぐわないものでありましょう。けれども、啓示はわたしたちに、あの方には人間のことが心に掛かっている、あの方は人間を愛しておられると言っています。聖書全体が神の愛の啓示で満たされています。イエスの現存在全体はこの啓示を告げ知らせるものです。イエスの現存在は本当の啓示です。つまりそこでは、世界の本質からも人間の本質からも決して認識することのできない何かが知らされているのです。ここで打ち明けられている神愛は、あの方がご自身の被造物に対して好意を抱いておられるのみでなく、被造物を実際に愛しておられることを、それも、托身が証言しているあの真剣さをもって愛しておられることを意味するものです。そして托身とは、あの方がこの愛の中へとご自身を与え入れられ、いわば、この愛をご自身の定めとなさったことなのです。この愛は創造において既にその自己啓示を準備しています。そして、聖なる歴史がキリストに向けて導かれていくなかで次第に明瞭になっていきます。そして遂に、キリストご自身において、キリストの心情において、キリストの生涯において、決定的な突破を敢行します。このキリストから更に、この愛は、摂理の中で、そして摂理の中で起こっていることの中で、新たな人間が生成していくなかで、神の王国が到来するなかで、時空を貫いて広がっていっているのです。(原注14)

この愛の源泉の周囲にはひとつの深い秘密が横たわっていて、神が人間に対してこのような心情を抱いておられるのは何故なのかとの問いに対する答えは、人間の側から見出すことはできないようになっています。この愛は自由な冒険であり、清らかで純粋のプレゼントであり、この愛自身が自らにとっての創造的根拠なのです。ところで、この愛についてのイメージが贋物となったり劣悪なものとなったりしてはならないとするなら、忘れてならない第二のことがこの愛には属しています。すなわち、この愛は神に相応しいものでなければならず、しかも、この愛がそのような愛であるためには、ペルソナである人間にも相応しいものでなければならないということです。この点は、神が人間に対して敬意を抱いておられるということによって生じてくることです。人間が自由と責任という尊厳を備えたペルソナであるようにと、神が欲されて以降、あの方はペルソナの本質に対応する仕方で人間にも対しておられます。これは、敬意を払うことを神に強制するような何かに人間が自力でなっているということを意味するものではありません。人間が何であるにしても、人間がそのものであることも、人間がペルソナという尊厳を備えた仕方でそのものになっていることも、神が人間に与えられたことです。ただし、そのようなものであるということを、神は人間に現実に、すなわち本当に、そして誠実に与えられたのです。ですから、神はこのことを真面目に受け止めることをもなさるのです。ご自身の名誉のために神は人間の名誉をも守られます。この点は強調しておかねばなりません。というのは、神の絶対的主権性を見る見方にも、人間の胡乱臭さを見る見方にも、神の尊厳にも神の被造物の尊厳にもそぐわない類いのものはあるからです。人間の名誉を奪ったからといって、それが神に名誉を帰すことになる

わけではありません。人間は被造物にすぎず、その上、堕落していて、大きく道を外れてもいます。けれども、無でもなければ、単なる全くの非価値でもなく、神が人間を愛しておられるからには、その人間は神の前において意味のある存在なのです。

願い

この神へと願いは向っています。まず最初に自ずと起こって来るものと言ってもよいほど、願いとは神の本性と人間の真実とに対応しているものなのです。困ったときには、子供は母親のところへ行きます。人は困難に遭遇すると、友人を尋ねて行きます——同じように、人間の心は、自分に好意を抱いてくださっていると信じている全能の方のほうを思わず向いてしまうものなのです。イエスは、父のもとへ行って、「日々のパンを」、ということは即ち、わたしたちの生活に必要なものは全てということですが、手に入れるまで父に願い続けるようにとわたしたちに教えておられます。さらにあの方は、「天におられる父は、あなたがたが何を必要としているか、あなたがたがそれをあの方に請いに行く以前に、既にもうご存じ」なのだから（マタ六・八）、回りくどいことはせずに、率直に、信頼をもって願うようにと諭してもおられます。この意味での願うことがどれほど自明のことであるかは、ルカ〔福音書〕が第一一章〔一節以下〕で報告している出来事から明瞭になります。あそこで、弟子たちは自分たちの師のもとへやって来て、祈ることをやはり教えてくださるようにと言います。彼らが言っているのは、端的に、祈るというこ